
アマガミ とある男子高校生の物語

月下氷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アマガミ とある男子高校生の物語

【Nコード】

N0176Z

【作者名】

月下氷人

【あらすじ】

輝日東高校に入学した主人公『加藤 悠人』がおくる普通？の高校生活の物語です。

アマガミ2期放送するので、思わず書いてしまいました！。物語は高校1年生から始まります。メインヒロインは未定ですけど、七咲にしたいなあと私は思います。

設定（前書き）

本来のアマガミは90年代のお話ですが、この小説では2011年
辺りの物語と設定しています。なので、携帯電話、p c、p s p、w
i i など余裕で出てきます。

設定

若干ネタバレがあります

本作の主人公

- ・名前 加藤 悠人^{ゆうと}
- ・クラス 1年A組 2年A組
- ・誕生日 10月10日
- ・身長 純一より少しだけ低い
- ・髪型 純一より長い髪
- ・顔 イケメン（女性顔に近いかも）
- ・性格 少しめんどくさがり屋 天然
- ・家族構成 父、母、妹
- ・学力 1位、2位を争うくらい頭がいい
- ・特技 ギター（アコギ、エレキ） ピアノ 料理 水泳 ケンカ
- ・好きなもの（こと） 楽器を弾く アニメ 漫画 お宝本、DVD 甘いもの、可愛いもの

輝日東高校の生徒会長をしている。（訳あり）

運動もほぼできる。

純一、美也、梨穂子とは幼馴染。梅原とは小学生から、薫は中学からの悪友。

制服はかなりくずしている。（シャツ出しゃネクタイを緩めているなど）

一人暮らしで一戸建てに住んでいる。

親と妹は転勤でアメリカに住んでいる。

水泳は母親に無理矢理やらされた。けど、ピアノ、ギターは自分も好きで、父親から習った。

顔は女性顔に近い。ギリ男性顔。女顔と言われるのが嫌い。

ケンカがかなり強い。暴力事件も何度も起こしている。このことは、純一とその関係者しか知らない。

設定（後書き）

Angel beats!の2次創作と同時進行なので、更新が遅れる場合がありますので、その時はすみません。

第1話 入学と生徒会長就任（前書き）

どうも月下氷人です。アマガミの小説どうしても書きたくて書いてしまいました。どうぞよろしくお願いします。

第1話 入学と生徒会長就任

俺は今日から高校生になる。
やったぜー。

俺は気分がいいので親友の橘純一を起こしに行きたいなと思います。
ちなみに純一の家は俺の家から徒歩五分くらいです。

ピンポン

「加藤です」

ガチャ

「おつ美也ちゃん」

「あつユウ君。おはよう」

「おはよう」

彼女は橘美也。純一の妹である。
美也ちゃんは猫っぽくてかわいいなー。

「何ジロジロ見てるの？」

「あ、いやー、美也ちゃんが可愛くて」

「ちょ…／／／朝から何言ってるの／／／」

「いやー、それより純一起きてる？」

「にいにならまだ寝てるけど…」

「相変わらずだなー。今日から高校生なのに…」

「そつかー。にいとユウ君はもう高校生かー」

「うん。美也ちゃんは今中3だっけ？」

「そつだよ。受験勉強めんどくさいよ」

「まあ、そうだけであつという間だよ」

「そうかなー」

「うん。そろそろ純一起こさないと」

「そつだね。上がってー」

「それじゃあ、お邪魔します」

俺は橘家へ上がらせてもらった。
俺は純一の部屋に行った。

「いない…ってことは押入れか…」

俺は押入れを開けた。

「起きろー。純一」

起きない…。そうだ!!

「俺のi p o dを音量M A Xにして…」

俺は純一にイヤホンをさせ、音量M A Xで音楽をかけた。

「ギャー！ー！！！」

「やっと起きた」

「何すんだよー」

「純一が起きねーから」

「てかなんでユウがここにいるの？」

「おまえを起こしに来た。今日から高校生だろ。ほら、早く制服に着替えろ」

「へいへい」

俺は下に戻り、美也ちゃんと適当にしゃべった。

その後、純一がおりて来て、朝食を食べ、行く準備が整った。ちなみに俺も朝食をいただいた。

「よし、じゃあ行くか」

「そうだな」

「にいとユウ君いつてらっしゃーい」

「美也ちゃん学校は」

「みゃーは明日から」

「そうか、じゃあ」

俺は橘家をあとにした。

登校中

「今年こそは彼女つくりたいな」

「はあー」

純一は大きく溜息をついた。

無理もないかー。あのクリスマスのこといまだに引きずってるみたいだし…。

「元気だせよ、純一。今年はできるよ」

「いいよなーユウは。イケメンだし、頭いいし……。おまえ絶対モテてるだろ!？」

「んなことねーよ」

「絶対にモテてるね!！」

「どーした2人とも？」

突如不審者が現れた。

「「おまえだれ?」「」

「2人とも会っていきなりそれかよー」

もちろん知っている。こいつは梅原正吉。悪友だ。

「まあこれを見てみ？」

「「おおー!!! これは!?!」「」

「お宝本だぜ」

「いやー思い出した。君は小学生からの悪友の梅原正吉君ではないかー。なあ純一」

「いやー僕も今思い出したよー」

「そうかそうか。いやーこれは手に入れるのが大変だったぜ。あとで見してやるよ」

「「流石梅原ー！！」」

ちなみに俺はこういう本やDVDはけっこう好きである。見ちゃ悪いか！？ 俺だって男だぜ！？
こういうのに興味あって当然だろー。

「さてそれは入学式が終わった後のお楽しみってことでー」

俺らは学校へ向かった。

しばらく歩いていたら、俺の携帯が振動した。
メールだ。

「えーと、げっジジイからだ」

「ジジイって誰だ？」

「輝日東の校長だ」

「おまえ校長と知り合いなのか！？」

「そうなの！？」

「まあ、一応。親戚だな。あのジジイが入れて言ったからここに

入った」

「すげーな」

「うざいだけだ。えっとメールの内容は…」

- - - - -
- - - - -

学校に着いたら、校長室へ来てくれ。

よろしくー（＾・＾）／

- - - - -
- - - - -

「めんどい…」

「校長顔文字使ってるな」

「そうだね…」

少々頭がおかしい校長である。

そんなことしてるうちに学校に着いた。
俺たちは今、クラス表を見ている。

「お、俺A組みだ」

「僕もA」

「俺もだ」

「また一緒か」

「ああ」

「そうだね」

ちなみに中学の時も同じクラスだった。

「んじゃ俺は校長のアホのところに رفتてくるから」

「ああ。んじゃまた後で」

「じゃあな」

俺は校長室へ向かった。

本当何の用だよ？

校長室

「来たね」

「何のようですかジジイ」

「ジジイと呼ぶな！」

「んで何のよう、ジジイ」

「せめて学校でくらいちゃんと校長先生って呼んで」

「用件無いなら帰りますよ」

「わかったわかったからー。帰らないでー」

「んで何の用です？」

「ゴホン。実は昨年度で生徒会長が転校してしまつて。それで、悠人に生徒会長をしてもらいたいのだが…」

「お断りです。では失礼します」

「待つてー。もう少し考えてよ」

「面倒そうなんで」

「そう言わず」

「そもそもなんで俺なんですか？ 今の三年生にでも頼んでくださいよ」

「何のために奨学金を出したと思つてる？」

「俺を生徒会長にするため？」

「ダッツライト！！」

「殺す！！！」

「ごめんなさいごめんなさい」

「いいのか？一年の俺にやらせて？」

「問題はない！！すでに3月の修了式で言っている。来年度の生徒会長は入学する1年生がやると」

「それで何でそんなに俺をそんなに生徒会長にしたがる？」

「親戚の関係だから」

「それだけ？」

「それだけ」

「殺す！！！」

「待った待ったー！！じゃあ交渉しよう」

「その手には乗らん」

「もし生徒会長になってくれたら、私の秘蔵のお宝本とDVDセットをプレゼントをしよう」

「ちょっと考えさせてくれ」

エロ本とエロDVDで考えを変えるとか俺、どんだけの人間だよ…

「じゃああともう少し奨学金くれたらやる」

「わかった」

「よし、交渉成立ー。生徒会長になってやるよ」

「おおーありがとう」

「いえいえ。お宝本とDVDもよろしくお願いしますよ」

「もちろん」

こうして俺は生徒会長になった。
エロ本とエロDVDのために…

1 - A 教室

俺の席は窓際の1番後ろの横である。左隣は女子である。俺の斜めが純一で俺の右隣が梅原である。

「あんたもこのクラスなの？」

「お、薰かー。久しぶりー」

「久しぶりー」

「そういえば、純一たちは？」

「トイレにでも行ったんじゃない？」

「そうかー」

「ジー」

「なにジツと俺の顔を見てるんだよ？」

「いやー前々から思ってたけど、けっこうユウって女顔だなーって」

女顔だと…。 けっこう凹むぜ…。

「いやそんなに凹まないで。よく見たらよ」

「そうか…。 よく見たからか…」

「私もちょっとトイレ行ってくるねー」

「ああ」

薫もトイレに行ってしまった。
にしてもけっこう凹むな！。

……暇だなー。お隣さんにでも声をかけよう。

「お隣さん。名前なんて言うの？」

「え？ 田中恵子です……」

「田中かー。俺は加藤悠人。みんなにはユウとか呼ばれてるよ。まあ、好きなように呼んで。よろしくー」

「よ、よろしくお願いします……」

あら、ちょっといきなりすぎたか？

「あ、わりいー。いきなりすぎたかー」

「そんなことない。嬉しい……。話しかけてくれて」

「そうか、それはよかった。ところで俺の顔って女顔？」

「え？ 別にそこまで女顔じゃないと思う……」

「少しは女顔っぽいってこと？」

「う、うん」

「そうか…」

「でもその…… かつこいい顔だと思いますよ」

田中が頬を赤くしながら言った。
その照れた顔かわいいな！。

「そんなに见ないでください…／＼／」

「いや、かわいいなーって思っ…」

「え／＼！？ そんなことないですよ／＼／」

「いやかわいって。それよりありがとな」

「え？」

「俺の顔のこと」

「いえ」

「あと敬語使わないでよ」

「え！？」

「俺らもう友達だろ」

「あ、うん／＼／」

こうして田中と友達になった。

しばらくしたら、先生が来た。

「私がこのクラスの担当の高橋麻耶です。
よろしくね」

「なあユウ」

「どうしたマサ」

ちなみに俺は梅原正吉のことをマサと呼ぶ。

「あの先生けっこう美人じゃね？」

「確かに……」

純一にも確認してみよ。

「なあ純一……？」

……ダメだ。こいつかなり見惚れてる。
こいつ年上好きだからな！。

「静かに！！ 加藤君」

「すみません。ってよく俺の名前すぐにでましたね」

「まあ、あなたは有名だから」

「有名？」

「おまえも何かやらかしたのか!？」

「そうなの!？」

「流石ユウね」

マサ、純一、薫が言ってきた。

まあ、多分あれのことだろう。

「まあ、加藤君のことはあとでってことで。これから入学式だから。廊下に並んで体育館に行くわよ」

入学式かー。めんどい…。

俺たちは今体育館に向かってます。

はいかなりめんどいです。帰ってギターでも弾きたいです。

「なあユウ、一体何やらかしたんだ？」

「もしかしたら校長先生と関係あるの？」

「そついえば朝呼ばれてたな」

「純一君、正解です」

「んで何があつたんだ？」

「実はな…」

俺は純一とマサに生徒会長になったことを話した。

「なにー！？ ユウが生徒会長だつて！？」

「声が大きい」

「よく引き受けたよね」

「ある物を手に入れるために俺は生徒会長になった」

「ある物？」

「それはだな…」

「なにー！？ お宝本とお宝本DVDだと！？」

「ああ。このあと取りに行くつもりだ。マサのと一緒にあとで鑑賞会だ」

「「おう」

訳のわからないやりとりをしてるうちに体育館に着いた。

入学式開始5分後…

俺爆睡中。

「ええ、新入生の皆さん入学おめでとうございます。えー…」

「…zzz」

「起きろー！！！」

「イッテー！！ 何すんだよ麻耶ちゃん！？」

「麻耶ちゃんって何よ。それより寝るなー！！」

「へーい」

「クスッ」

前にいる田中に笑われた。

アホ3人（純一、マサ、薫）は腹を抱えながら必死で笑いを抑えていた。あとで覚えとろよー！！

「えつと実は今年度の生徒会長がこちらの都合上新入生の方が生徒会長になることになりました。それじゃあ、加藤君でてください
い」

「はあー!？」

「『あつははは』」

アホ3人が笑いだした。

「てめーら笑うな」

「まさかユウが生徒会長になるとは」

なぜか薫が知っていた。大方純一がマサにでも聞いたのだろう。

「早く教壇へ行ってください」

「へーい」

俺は教壇へあがった。

「えーと、何か挨拶すればいいんですか？」

「はい」

まさかこんなことになるとは…

「えーと、急遽生徒会長になることになった1-Aの加藤悠人です。まあ、なった理由は、ここのアホの校長のせいです。別に俺がなりたいてっていつてなった訳でないんで。よろしくー」

適当に挨拶して俺は教壇を降りた。

そして入学式が終わり、教室へ戻った。
俺は薫と話をしていた。

「ユウよく引き受けたわね。ユウ頭はかなりいいけど、こっぴどくのは普通やらないでしょ？」

「まあね。ある物のために俺は生徒会長になったんだ」

「ある物？」

「それはご想像にお任せします」

「ふーん。言えない物が」

「女子に言ったらひかれる」

「もうわかったわ。よくそれだけで引き受けたわね」

「まあ、それだけじゃないんだよね。いろいろお世話になってるし……。その恩返しみたいなのもある」

「そう。そういえば私新しい友達ができたのよ」

「友達？」

「私の友達恵子です」

「何だ田中か」

「何だって何よ？」

「もうすでに俺らはお友達です。なあ田中」

「う、うん／＼」

「ちょっと恵子？ 何で顔が赤いの？ ユウ、何かしたでしょ。お尻触ったとか」

「俺はただ普通におしゃべりしただけだ」

「嘘おっしやい！！」

「んだとー！！」

「はいはい、みんな席着いて」

麻耶ちゃんが来た。

「ほら、加藤君、棚町さん、早く座りなさい」

「へーい」

「はーい」

俺らは麻耶ちゃんが言った通りに座った。

「明日は係り決めと教科書配布があるから。あと加藤君はあとで職

「員室に来て」

「えー!!」

「来るのよ」

「…へい」

「じゃあ今日は終わり」

俺は職員室に行くことになった。

このあと純一とマサとでお宝鑑賞会だというのに…。あとで校長室に行かないといけないし…。

「なあ純一、マサ、ちょっと待っててくんない」

「了解だよ」

「了解。大将のお宝のためだ」

こうして職員室に俺は行った。

「来たわね」

「何の用です？ 麻耶ちゃん」

「その麻耶ちゃんっていつのやめなさい」

「いいじゃん」

「じゃあ何で麻耶ちゃんって呼ぶのよ」

「それは…可愛いから？」

「私が？」

「そう」

「…／／／。お、お世辞でも嬉しいわ／／／」

「お世辞なんかじゃありませんよ。それじゃあ俺はこれで…」

「待ちなさい。本題がまだ残っているわ」

「う…」

早く鑑賞会をしたい…

「まあすぐに終わるから」

「早くしてくださいよ」

麻耶ちゃんから生徒会長のことについていろいろ聞かされた。
めんどくさいなー。

「まあ生徒会長についてはこのくらいかな。」

今日はもう帰っていいわよ。明日からビシバシ働いてもらうから」

「へーい。そうじゃ、さいならー」

「さよなら」

俺は校長室へ行き例の物を手に入れ、純一たちと合流した。

「なあどこで鑑賞会する？」

「うちは美也が多分いるから…」

「それじゃあ俺ん家でいいよ。俺現在一人暮らしだし」

「そうか。ユウの家族アメリカにいるんだっけ？」

「イエス」

「それじゃあ決まり!-!」

俺の家で鑑賞会をすることになった。

この後はいろいろと問題があるため、カット

純一、マサ帰宅後

いやー、鑑賞会楽しかったなー。

ジジイもいいの持ってるなー。

そんな人が高校の校長やってていいのか？

……風呂入って寝よ。

俺は風呂に入ってすぐに寝た。

なんかいろいろと疲れたぜ。

第1話 入学と生徒会長就任（後書き）

なんか無理矢理感あつてすみません。

キャラの口調とか間違つてたらすみません。

あと主人公は梅原のことを「マサ」と呼んでいますが、小野大輔さんCV（ドラマCD）の原作の主人公の悪友「マサ」とは違いますので。ややこしくてすみません。悪友「マサ」は登場しませんので。

第2話 男子高校生の一日（前書き）

会話文ばかりですみません。

第2話 男子高校生の一日

俺今一人で登校なう。

今日は純一を起こしに寄らなかった。
毎回毎回めんどいじゃん。

お、あそこを歩いているのは、梨穂子じゃん。

「おはよう梨穂子」

「あ、おはよう悠人」

「あ、君ってあの昨日の生徒会長？ 桜井と知り合いだったんだ」

「うん、幼馴染なんだ」

「えっと…どちらさま？」

「あ、ごめん。私伊藤香苗つています。よろしくね」

伊藤香苗かー。笑顔が可愛いなー。

「俺は加藤悠人。えーと……伊藤の笑顔って可愛いな」

「えっ／＼／ それ本気で言ってる／＼／！？」

「嘘だったと言わないよ」

顔が真っ赤な伊藤も可愛いなー。

「悠人天然だからねー」

「梨穂子には言われたくないよ」

「むー」

「梨穂子の怒った顔も可愛いな」

「そ、そう／＼／＼　ありがとう／＼／＼」

照れた梨穂子もこれまた可愛い。

「……／＼／＼」

「おーい伊藤？　大丈夫か？」

「…はづ。だ、だ、大丈夫な訳ないでしょ／＼／＼　いきなりあんなこと言つて／＼／＼」

「言つちやダメだったか？」

「そんな訳ないけど、でも／＼／＼」

「いいじゃねえか」

「う、うん。私のこと香苗って呼んでいいから」

「わかった。香苗」

「悠人すごいなー。会つてすぐに仲良くなるとは」

「そうか？」

「桜井に悠人君、早く行こう」

「おう」

「うん」

こうして俺、梨穂子、香苗で登校した。

1 - A 教室

「おはよう田中」

「おはよう加藤君」

「あ、俺のこと下の名前で呼んでくれない？ 加藤だと少し反応が悪いから」

「え！？ う、うんわかった。わ、私のことも下の名前で呼んで／／」

たな… 恵子が照れながら言った。

下の名前で呼び合うくらいで照れるかな？

「わかった、恵子」

「おっすユウ」

「薰か。おっはー」

「って何で恵子また顔が赤いの！？ ちょっとユウまたなんかやっただでしょ！？ 今度はスカートめくったとか」

「んなことしてねーよ？ ただ下の名前で呼び合おうって言っただけだ」

「…あんた凄いわね」

「何が？」

「……ダメだこりゃ」

もう何言ってるのかわからない…。

「おっすー、ユウ」

「おっすマサ」

「そっいえばお前けっこう噂になってるぞー」

「ああー。生徒会長のことが」

「そうそう。なんかもう1年生だけじゃなくて2、3年生でも噂になってるらしいぜ」

「へえー。でも私は中学の時から付き合いだけどさー、あんたって頭はいいけどこういう面倒なことはやらないやつじゃん」

「だから言っただろ。お宝のためだと」

「薫。お宝って何？」

「ああー、あれよ。俗に言うエッチな本とかDVDよ」

「え…あ…／／／ 悠人君ってえ、えっちな本とか読むの？」

「あ、いや違うんだ！！ 違うくないけど…」

「案外こいつはあーゆう本を読むやつだから」

「う、うるさい／／／」

「はい、席について」

麻耶ちゃんが来た。

あれ…。そういえば純一まだ来てないな。

「遅れてすみませんー！！」

「橘君。入学式の次の日に遅刻なんてどういうことなの!？」

「本当にすみません」

「…早く席に着きなさい」

「…はい」

…純一には呆れるぜ。

「それじゃあ今日は最初に係り決めをやっちゃいたいと思います。
じゃあ加藤君がとりあえずしきって」

「えー!?! 俺ー!?!」

「生徒会長でしょ。さあ、早く」

「…了解です」

めんどくせーなー。まあ、ちゃちゃと終わらせますか。
俺は教卓のところに立った。

「じゃあとりあえずクラス委員を決めたいと思います。じゃあ誰か
いないか」

シーン

「じゃあ橘君ってことで」

「僕別に挙手してないだろ!!」

「いやー、やりたそうな顔してたから」

「どんな顔だよそれ!!」

「じゃあマサ」

「なんでやねん」

「はい、ツツコミありがとねー。じゃあ真面目に、誰かいないかー」

「じゃあ誰もいないなら、私がやります」

「お、えーと名前は…絢辻さんだっけ？」

「はい」

「じゃあ絢辻さんに決定ってことで。じゃあ後は絢辻さんに任せます」

「わかったわ」

俺は絢辻に仕事を押し付け、席へ戻った。
いやー、ありがとう。

「じゃあ次は…」

他の人もどんどん係りが決まっていた。

ちなみに俺は生徒会長だから何も係りをやらなくてよかった。
にしても絢辻けっこう綺麗な人だよな！。

休み時間

「なあユウ、純一。今日も午前中で学校終わるからゲーセンでも行かない？」

「俺はオーケー」

「僕もいいよ」

「棚町も行かないか？」

「私も行くー」

薫が行くなら恵子も誘おうかなー。

「ねえ、恵子も行く？」

「うん。行こうかな」

「ユウが女の子を普通に誘うとは…。流石ユウだぜ。橘も見習えよ」

「梅原には言われたくないよ」

こうして話しているうちに、休み時間が終わった。

この後は、教科書の配布だけで終わった。

「明日から始まるから。まあ午後は部活紹介のオリエンテーションだから授業は午前中だけよ。じゃあ今日は終わり」

午前中で終わる学校は楽でいいなー。

「あ、加藤君と…絢辻さん。ちょっと手伝って欲しいことがあるからあとで職員室に来てね」

「わかりました」

「えー」

「来るように」

「…了解です」

これからゲーセン行く予定があつたのに…

「悪いみんな。さっさと終わらせてすぐ行くからいつものゲーセンで待ってて」

「わかったよ」

「了解!!」

「オーケー」

「うん」

みんなに謝り、職員室へ行くことにした。絢辻と一緒に行くか。

「絢辻ー。とっとと仕事終わらそうぜ」

「うん」

絢辻を誘い、職員室へ向かった。

「加藤君って何で生徒会長になったの？」

「できれば下の名前で呼んでくれない？俺苗字で呼ばれるとどうも反応が悪いから」

「わかったわ。確か下の名前は…」

「悠人だよ」

「悠人君ね」

「おう」

会話してるうちに、職員室へ着いた。
荷物運びをされた。めんどかったぜ。

「荷物運びを頼むとは…」

「まあ、あの量を先生一人は大変よ」

「そうか？ けどこっちの身にもなって欲しいよ」

「ふふっ。そうね」

お、絢辻の笑顔かわいいな！。

「どうしたの？ そんな私のこと見て」

「いやー、絢辻の笑顔がかわいいなーと思って」

「あ、ありがとう／＼／」

お、今度は照れた。

「んじゃ俺もう行くね。また明日ね」

「うん。また明日」

俺は絢辻と別れ、純一のいるゲーセンへ向かった。

ゲーセン到着ー。

さてどこにいるかな？

俺はとりあえず格ゲーコーナーに行ってみた。

「ビンゴ」

みんなを発見した。

「みんな、遅くなってごめん」

「遅いぞ、大将」

どうやら純一とマサはが格ゲーをやっており、薫と恵子がそれを見ていた。

「じゃあ俺音ゲーやってくるから」

「じゃあ私も行くー」

「じゃあ私も」

俺、薫、恵子は音ゲーコーナーに行った。

ちなみにやる音ゲーは u b e a t (ビート) である。あれ超面白よ。

「お、全部の台空いてるじゃん。じゃあ対戦しようぜ」

「いいわね」

「うん」

俺は100円入れた。

おなじ曲ならLevelは各個人で決められる。

「じゃあこの曲で」

「オーケー」

「うん」

俺はLevel110でスタート!!

「あんた凄いわね。どんだけやってるのよ」

「まだ始めて2ヶ月ちょい」

「呑み込み速いわね……」

「薫だつてけっこうできてるじゃん」

「私も少しやってたりしてー」

おつ、薫の笑顔意外とかわいい。

「お前の笑顔って意外とかわいいんだな」

「な、何よいきなり／＼／ 照れるじゃない／＼／」

「ははは」

「……」

恵子がなんか睨んでくる…。

「……そう睨まないでくれ。ほれ、なでなで」

俺は恵子の頭を撫でた。

「／／／／」

あ、照れた。かわいい。

「ちょっと便所に行ってくるね」

「わかったわ」

「う、うん」

俺は便所へ向かった。

「あいつってば…。平気であんなこと言ってくるなんて…。天然だわ」

「うん。私も天然だと思う」

「ちょっとそこの女の子たち」

俺は便所を済まし、薫たちのところへ向かった。
ん？ 男2人が薫たちのことナンパしてる？

「だから俺たちとこれから遊ばない？」

「遊ばないわよ」

「いいじゃんよー」

完全ナンパだな。恵子なんてもうかなり怯えてるじゃん。早く助けないと。

「その辺にしてもらえますか？」

「なんだてめえ？」

「ユウ」

「悠人君…」

「彼女らの友達です」

「邪魔すんじゃないぞ」

「そうだぞ」

男のうち1人が殴りかかってきた。ここで俺が殴ったら、警察に確実に連行させられるな…。俺は男のパンチを片手で受け止めた。

「何!？」

「あー。痛い目に合いたくなかったら俺の視界から消えてもらえますかね」

俺は男2人を睨みつけた。

「ひっ…。おい逃げるぞ」

男2人は逃げていった。よかったー、暴力ほぼなしで解決できて。警察沙汰はもうごめんだからな！。

「ありがとう、ユウ」

「おう。って恵子大丈夫？」

恵子が泣いていた。怖かったんだな。

「もう大丈夫だ。ごめんな。俺が誘ったばかり…」

俺は恵子の頭を撫でながら言った。

「うっん。悠人君のせいじゃないよ」

「おいーす。…て何田中さんを泣かせてんだよ?」

「どうかしたの?」

純一とマサが来た。来るのおせーよ…。

俺はさつき起きたことを話した。

「そりゃあ大変だったな」

「ユウ!! 暴力とかしなかったか!? 怪我とかない!?!」

「大丈夫だ。睨みつけたら逃げて行つた。怪我もない。ありがとな」

「よかったよ」

俺の事を純一はよく知っている。同時に純一の事を俺はよく知っている。

その後、みんなでレースゲームしたりした。

「今の時間は…1時か。みんな昼飯とかどうする? みんなで食べに行く?」

「悪いい、大将。これから俺店の手伝いがあるから」

そうか。マサの家は寿司屋なんだっけ。

「ごめーん。これから私もバイトがあるから」

「私も用事が…」

「僕は別にいいよ」

純一だけか…。

「じゃあ2人でどっか食べに行くか」

「そうだね」

「じゃあこれで解散だね。恵子に薫…、今日は本当にごめんな」

「いいよ別に。あんたが悪い訳じゃないし。楽しかったわよ」

「うん。悠人君が悪いわけじゃないから」

「ありがとう」

マサ、薫、恵子と別れ、純一と一緒に飯食いに行った。

どこに行くか迷った結果、無難にファミレスにした。
俺たちはファミレスに入った。

「いらっしやいませー。只今店内は大変混み合ってますので、少々待っていただく事になりますか…」

そうなのか…。お、あそこにいるのは梨穂子と香苗じゃん」

「向こうに知り合いがたまたまいたので…」

「はい、わかりました」

「え、知り合い？」

「ほらあそこに」

「あ、梨穂子じゃん。ともう1人は知らない子だよ。いいの？」

「問題ない。俺は知ってる。女の子と仲良くなれ」

「えー」

「ほらほら」

俺は無理矢理純一を連れて行つた。

「相席いいですか」

「え！？　って悠人君かー」

「あ、悠人に…純一！？」

「やつほー」

「ども…」

梨穂子の反応…。もしかしたら…純一のことが好きなのか！？
…

あとで聞いてみよう。
俺と純一は席に座った。
ちなみに座り方は

—
香

—
俺

—
梨

—
純

である。わかりづらいなー。

「橘君も悠人君と桜井の幼馴染なんだ」

「ええ、まあ」

「2人はもう頼んだの？」

「ううん。まだ来たばっかなの私たち」

ジャストタイミングで来たな俺たち…。

「じゃあ僕はミートスパゲティにしよう」

「私はカレーライスにしようつと」

「私はオムライスと…」

「梨穂子…。ほどほどにしとけよ」

「うつ…。純一のいじわる…」

「体重気にしてるんだろ」

「う、うん。じゃあオムライスだけでいいや」

「

「じゃあ押すぞ」

俺は店員コールボタンを押した。

「ご注文の方はお決まりでしょうか？　ってユウに純一！？」

「よう、薫」

「お前これ狙って来た？」

「さあ」

ウェイトレス姿で薫が接客しに来た。

「こんにちは柵町さん」

「ハ―イ、桜井さん…と…」

「伊藤香苗だよ。よろしくね」

「柵町薫よ。よろしくー」

女子3人が会話してる中、俺と純一は薫の太ももを拝んでいた。二
ーソックスいいねー。余計太ももがよく感じる。

「ちょっと2人ともどこ見てるのよ／＼／」

「いやー、その」

「薫の太もも」

「ユウ、そんなあっさりに」

「…本店はゲス野郎の御入店はお断りですので、とっとと出て行っ
てもらえます?」

「ちょっと…怖いよ薫…」

「「ごめんなさい」「」

「悠人君と橘君って意外と変態さん?」

「「いや、その、これは男して…それより注文」「」

「私オムライス」

「カレーライスで」

「僕はミートスパゲティで」

「俺は…チョコレートパフェで」

「昼食にパフェかよ」

「今日はそういう気分だから」

「はいはい。わかりました。少々お待ちを…」

薫がまた仕事に戻った。

「悠人君って甘いもの好きなの？」

「まあ、好きだよ」

「へえー（覚えとこつと）」

その後、注文したもので、適当にしゃべりながら昼食を食べた。

「じゃあそろそろ行くか。純一、ゴチになりまーす!」

俺は某番組のアレを言ってみた。

「「ゴチになりまーす」」

「なんでだよ!!」

「お前ビリだろ。あとおみや代も…」

「何の話だよ!!!」

「まあまあ、早く行きましょ」

俺たちは会計を済まし、店を出た。
あ、もちろん別々で払ったからね。

「じゃあ帰りますか」

「そうだね」

梨穂子と香苗と別れ、純一と一緒に帰った。

「じゃあねー、純一」

「うん」

純一の方が家が学校に若干近い。

俺は帰宅した。

今日は不良？に絡まれ、大変だったなー。

第2話 男子高校生の一日（後書き）

誤字脱字があったら、言ってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0176z/>

アマガミ とある男子高校生の物語

2011年12月1日17時00分発行